

聚碧園

有清園とは対照的に、聚碧園は、訪問者が座って風景の形や流れを鑑賞する場所です。

庭園を眺めるのに最適な位置は、かつて寺院の住職の邸宅であった客殿の裏手に向かった畳にあります。この場所では、池、小島、石灯籠が木製の廊下に切り取られた庭のパノラマを眼前に楽しむことができます。この眺めは、伝統的な屏風絵を連想させます。右を見ると、巧みに配置された窓から、「借景」として知られる日本庭園の手法によって取り入れられた大原の溪谷を一望できます。

三千院は782～806年の間に建立されましたが、誰が最初に聚碧園を造園したかはわかっていません。しかし、記録によれば、茶道の家元である金森宗和が江戸時代（1603-1868）に庭園を再設計したことが示されています。

庭園は、客殿のすぐ外にある池を特徴としています。池には多くの小島があり、小高い丘がそっと向こうにそびえています。傾斜の途中に石の塔が立っています。

聚碧園は「緑を集める庭園」という意味です。秋の数ヶ月間で最も美しく庭園を覆い尽くすもみじ木があります。

有清園と同様に、訪問者は、植物よりもむしろ、庭園での岩、造園、水のなどの要素の取り入れ方を鑑賞することが期待されています。

客殿の訪問者は、抹茶と伝統的な和菓子を楽しむことができます。